富永神社祭礼奉納

能　組

とき　昭和六十二年十月九日(金)
午後四時始
ところ　富永神社能楽殿

仕舞　鱗形　花井洋之
仕舞　西王母　伊藤万里子
小督　広部亜紀

狂言　口真似　太郎冠者　沢裕美　主　伊藤佐智子　客　白井里枝

半能　葛城　シテ　今泉利夫　ワキ　鈴木洋市　大鼓　清水利高　小鼓　永田六兵衛　太鼓　鈴木崇史　笛　太田康弘

仕舞　月宮殿　花井延昌
仕舞　羽衣　キリ　榊原香奈子
放下僧　クセ　鈴木克幸

狂言　舎弟　弟　田中賀教　兄　森田敏裕　教手　小田治

仕舞　遊行柳　太田康弘

狂言　鬼瓦　大名　安形忠久　太郎冠者　権田重紘

独調　月宮殿　キリ　長田驍　中嶋康夫

能　隅田川　シテツレ　大杉香寿美　シテ　鈴木肇　ワキ　太田康弘　ワキツレ　今泉利夫　大鼓　河村総一郎　小鼓　福井啓次郎　笛　今泉英三

竹生島　夏目茂斉

仕舞　養老　松井雅俊

松虫　本田三郎

舞囃子　花筐（クルイ）　松井彬

大鼓　河村総一郎
小鼓　今岡アイ子　笛　今泉英三

狂言　引括り　男　佐野元之助

女　酒井宏
立衆　山本憲吉
〃　中山伸一
〃　加藤賢一
〃　原田三男
〃　松井平

能　葵（シテレツ）上　シテ　長田郷　長田驍

ワキ　安藤武
ワキツレ　本田泰

大鼓　河村総一郎
小鼓　森田牧　太鼓　水谷清
笛　今泉英三

間　畑中良雄

附祝言

（終了予定　九時半頃）

主催　新城能楽社中
本町区

あらすじ

狂言

口真似

貰い物の酒を楽しく呑もうと主が程よい相手を連れて来る様にと太郎冠者に言い付けます。太郎冠者の案内して来たのは名うての酒くせの悪い人でした。困った主は適当にあしらって帰そうと思い口かずの多い太郎冠者に今日は身共の口真似をせよと言付けます。……

能

葛城

出羽の羽黒山から山伏が修験の旅に出て葛城山についたときには冬の最中で降りしきる雪のために前後も見えず木陰に休んでおりますと柴を背負った里女が現れて山伏を谷底の庵りに案内いたします。夜のふけるにつれて寒さはことさらつのるので女は標（小枝）を焚いてもてなします。いつしか身も心もあたたまった山伏は夜の勤行にとりかかろうとすると女はついでのことに加持祈禱をしてほしいとたのみます。山伏が不審に思うと女は己が葛城明神の化身であることを明かし昔仏法のための岩橋を架けなかった罰によって役行者の法力で葛葛でしばられて三熱の苦しみを受けているのでその罰劫を加持し給えと言って隠れてしまいます。山伏が一心に勤行していると女神があらわれて大和舞を舞い夜の明けぬうちにひっそりと雪の磐戸の内へ姿を消したのでした。能の中で冬の代表曲でございます。

狂言

舎弟

親から貰った名前があるのに兄からいつも舎弟と呼ばれていた弟。ふと舎弟と言うことばの意味に不審を抱き早速ものしりの某にたずねます。某はいたづら心で舎弟とは盗人の事だと教えます。そこで腹を立てた弟が兄のところへまいりまして、……

狂言

鬼瓦

永らく在京中の大名、許訟に勝って晴れて帰郷することになり在京中信仰した因幡堂のお薬師へお礼参りに出掛けます。供の太郎冠者と国もとで帰りを待っている妻の事を偲びながら……

能

隅田川

吉田某の妻が、その子梅若丸の行方を尋ねて都からはるばると隅田川のほとりまで狂って参ります。船中で船頭から幼い子が商人にかどわかされて奥州に下る途中、ここで病死したことを聞かされ、それが我が愛児とわかり嘆き悲しみます。船頭は今は如何に嘆いても甲斐なく、せめて母親の弔いこそ亡き子には何よりの供養であろうと狂女を墓前に案内して大念仏をすすめます。隅田川原に満月がのぼり母の唱える念仏が肺腑をえぐります。すると不思議なことに塚の中から幼子の唱和する声がきこえ母を慕うように梅若丸の亡霊が現れます。思わず手に手をとりかわそうとしますがもとよりまぼろし、あわれ消え失せてしまいます。やがて東の空が白らんでそこにはただ草茫々たる浅茅ヶ原に塚があるばかりでした。数多くある能の中で最も悲しい曲の一つであり特に母の念仏にあわせて塚の中から幼子が南無阿彌陀仏と唱えるあわれさには涙をさそわれます。物狂能の中で最も重い習物となっております。

狂言

引括り

余り口やかましい妻にあきた男。親もとえ休息に行けとすすめます。妻は離縁と感ずいて怒り出し、暇のしるしに貰った袋えすきな物を入れて行く約束で近所のおかみさんの力を借りて、すきな物を入れますが、そのすきな物とは……

葵上

左大臣の御息女葵上は物怪に取りつかれて病床に伏しております。どんな高僧の祈禱も効果がありません。そこで巫子にたのんで葵上に取りつくものの正体を梓にかけて呼びよせることにします。巫子が一心に祈るうちに異様な妖気がただよいおぼろの人影がみえてきます。これこそ六条御息女の生霊で、かつて光源氏の愛をうけていたのに葵上に奪われ恨みの生霊となって現われたのです。巫子がとめるのをふりはらって葵上の枕元に立ってあさましい後妻打ちの所行をみせた上で、ついに破れ車にのせて怨霊の世界に連れ去ろうとします。

そこで父の左大臣は修験者小聖を召し怨敵退散の調伏をたのみます。小聖はあまりの妖気に驚き数珠を押しもんで一心に祈ります。鬼女に変じた御息女の怨霊は打杖をふるって小聖を追返そうとしますが、次第次第に法力に屈し業苦の世界から得脱して成仏し消え去るという曲で光源氏をめぐる葵上と六条御息女との愛欲葛藤の物語りでございます。尚能のはじめに後見方が装束（小袖）を舞台正面にひろげて置きます。これを「出し小袖」といい病床に臥す葵上に見たてたもので能特有の象徴手段です。謡は奥伝の重い曲となっております

能装束・能面展示会

とき　十月十一日（日）午前十時より四時まで

ところ　新城文化会館和室